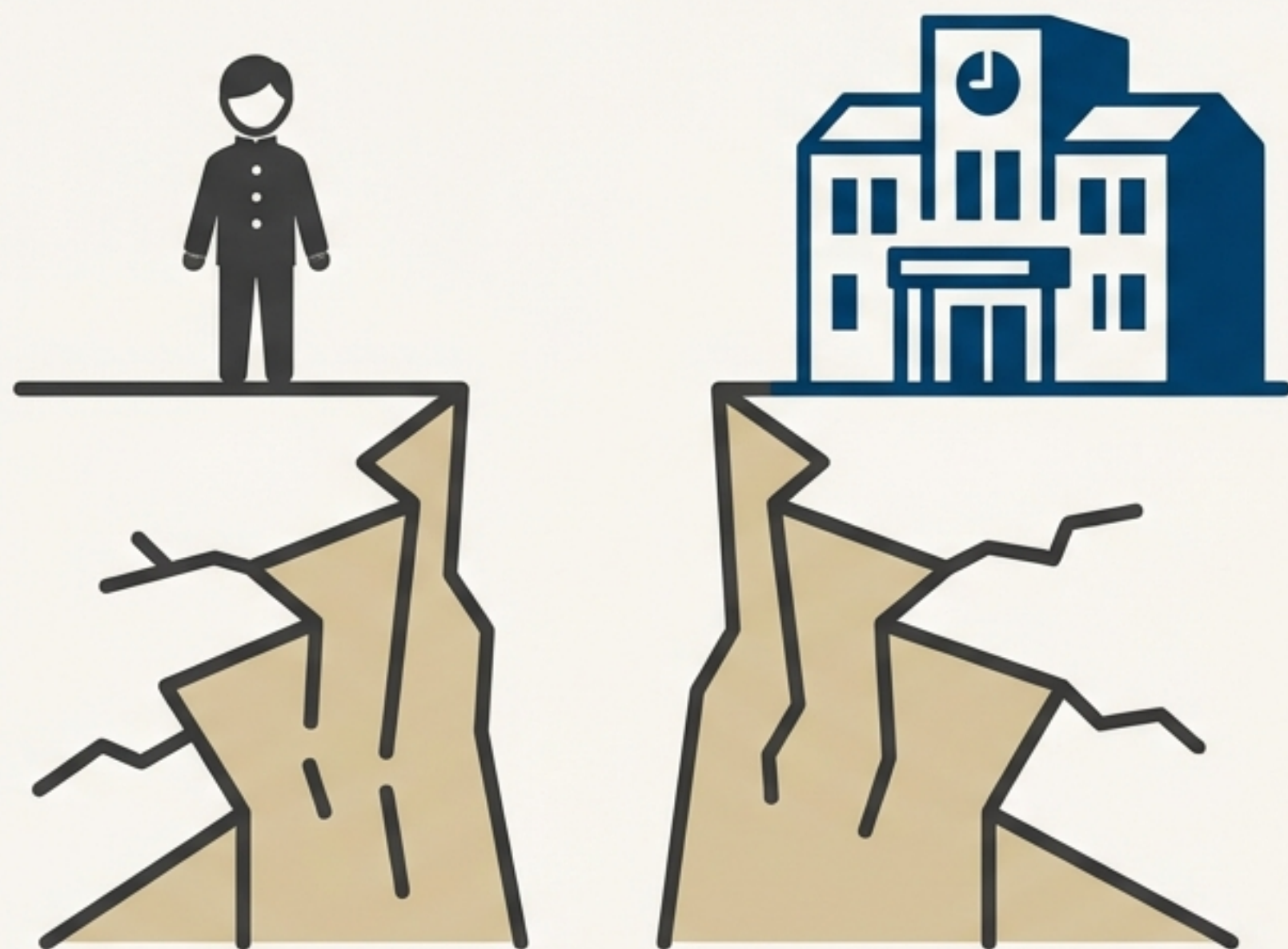


「中1の壁」を越えて、未来の学びへ



小中連携教育の社会的必要性とコーディネータ養成の展望



喫緊の課題： 「中1ギャップ」とは 何か？

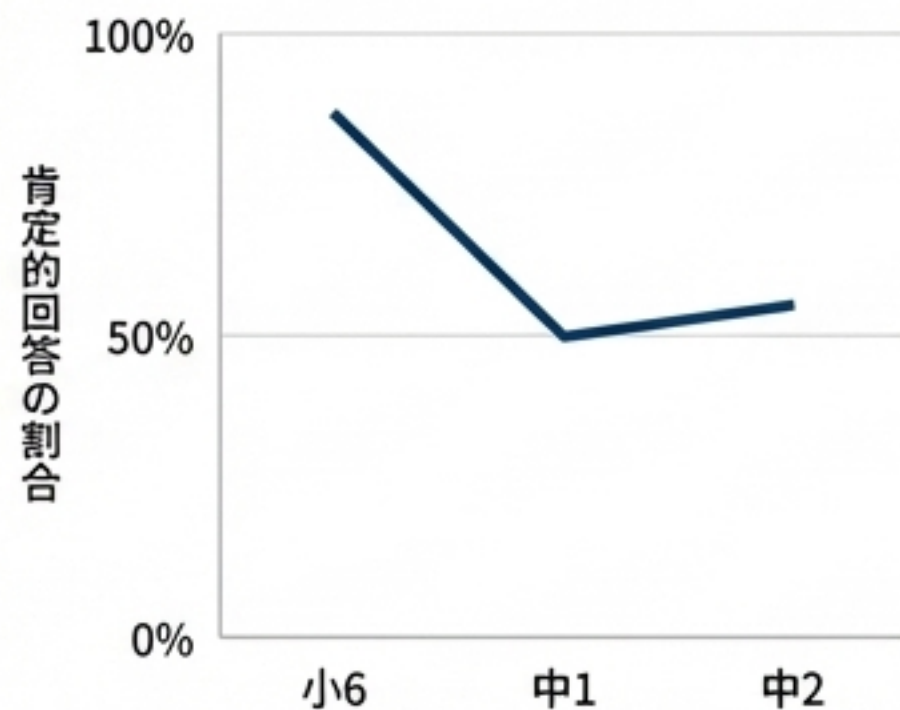
- 小学校から中学校への進学は、多くの児童にとって学習環境や生活様式が劇的に変化する時期です。
- この移行段階で、不登校の増加や学習意欲の低下といった深刻な問題が多発する現象、それが「中1ギャップ」です。
- この課題は長年指摘されながらも、依然として多くの学校現場が直面する重要な問題であり続けています。

データで見る「中1ギャップ」の実態

各種調査から、中学校1年生の段階で顕著な変化が見られます。

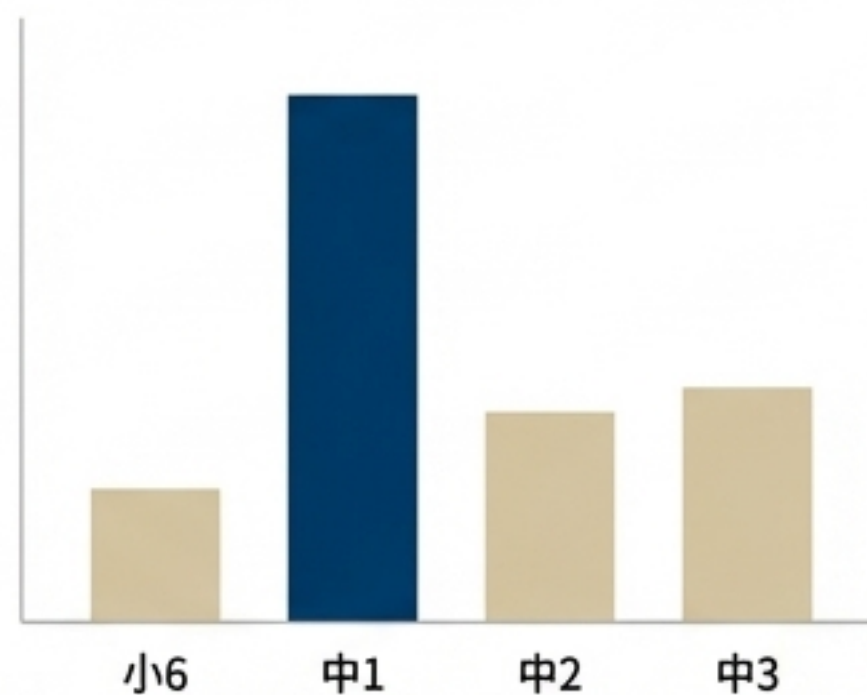
学習意欲の低下

「授業がよくわかる」「学校が楽しい」といった肯定的回答の割合が、中学生になると大きく減少。



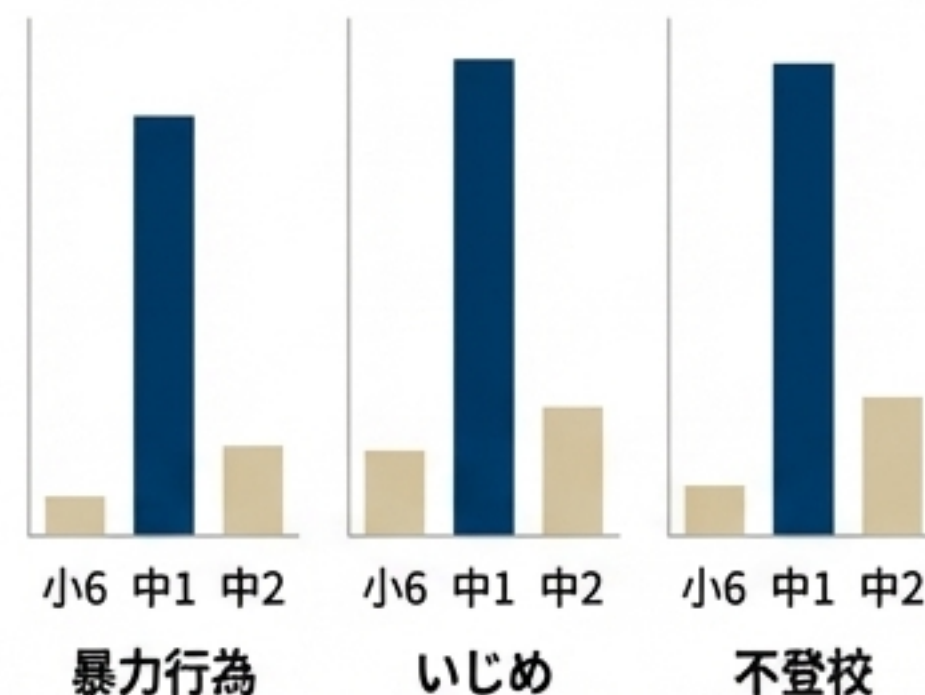
学習上の悩み

「上手な勉強の仕方がわからない」と回答する生徒数が、中学校1年生で急増。

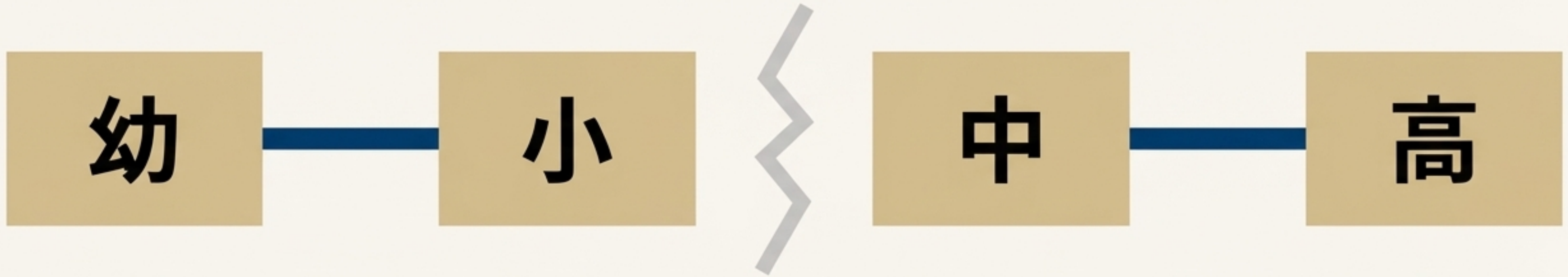


生徒指導上の諸問題

暴力行為の加害児童生徒数、いじめの認知件数、不登校児童生徒数が、いずれも中学校1年生で大幅に増加。



個別の問題から、教育システム全体の「断絶」へ



「中1ギャップ」は、単なる個人の不適応の問題ではありません。それは、日本の教育課程における「接続」の課題を浮き彫りにしています。

これまで、教育の連続性を確保するため、様々な学校段階での接続が政策的に推進されてきました。しかし、小学校と中学校の間には、依然として大きな断絶が残されています。

日本の教育政策における「接続」の歩みと、残された課題

これまでの政策は、特定の学校段階間の連携を強化してきました。

幼小接続

- 平成22年：「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」報告。
- 「連続性・一貫性」の重要性を提言。

小中連携

これまで全国的な取組の検証や支援の在り方に関する検討は十分になされてこなかった。

中高一貫教育

- 平成11年度：生徒の個性や創造性を伸ばす目的で制度導入。
- 選択の幅を広げ、学校制度の複線化を推進。

社会と時代が求める教育とは？

「中1ギャップ」の解決は、単なる問題対応に留まりません。

それは、これからの日本社会を担う子供たちを育むための、教育システム全体の変革一環です。

変化の激しい時代の中で、今、学校教育には何が求められているのでしょうか。

国家ビジョン：「令和の日本型学校教育」が示す未来

“「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての
子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、
協働的な学びの実現～”

中央教育審議会答申（令和3年1月26日）

個別最適な学び

一人一人の子供たちの可能性を
最大限に引き出す教育。

協働的な学び

多様な他者と協力しながら、
新たな価値を創造する学び。

この答申は、2020年代を通じて実現すべき学校教育の姿を明確に示し、全ての教育改革の基盤となっています。

令和の時代に求められる新しい教師像

「令和の日本型学校教育」答申は、これからの教職員の理想像を具体的に描いています。



探究し続ける学習者：教職生涯を通じて自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続ける。



子供の学びの伴走者：子供の主体的な学びを支援するファシリテーション能力を備える。



チームの一員：多様な専門スタッフ等と組織的・協働的に取り組む。



誇りを持てる専門職：創造的で魅力ある仕事として、高い志気を持って働く。

Society 5.0時代を生き抜くための教師の資質・能力

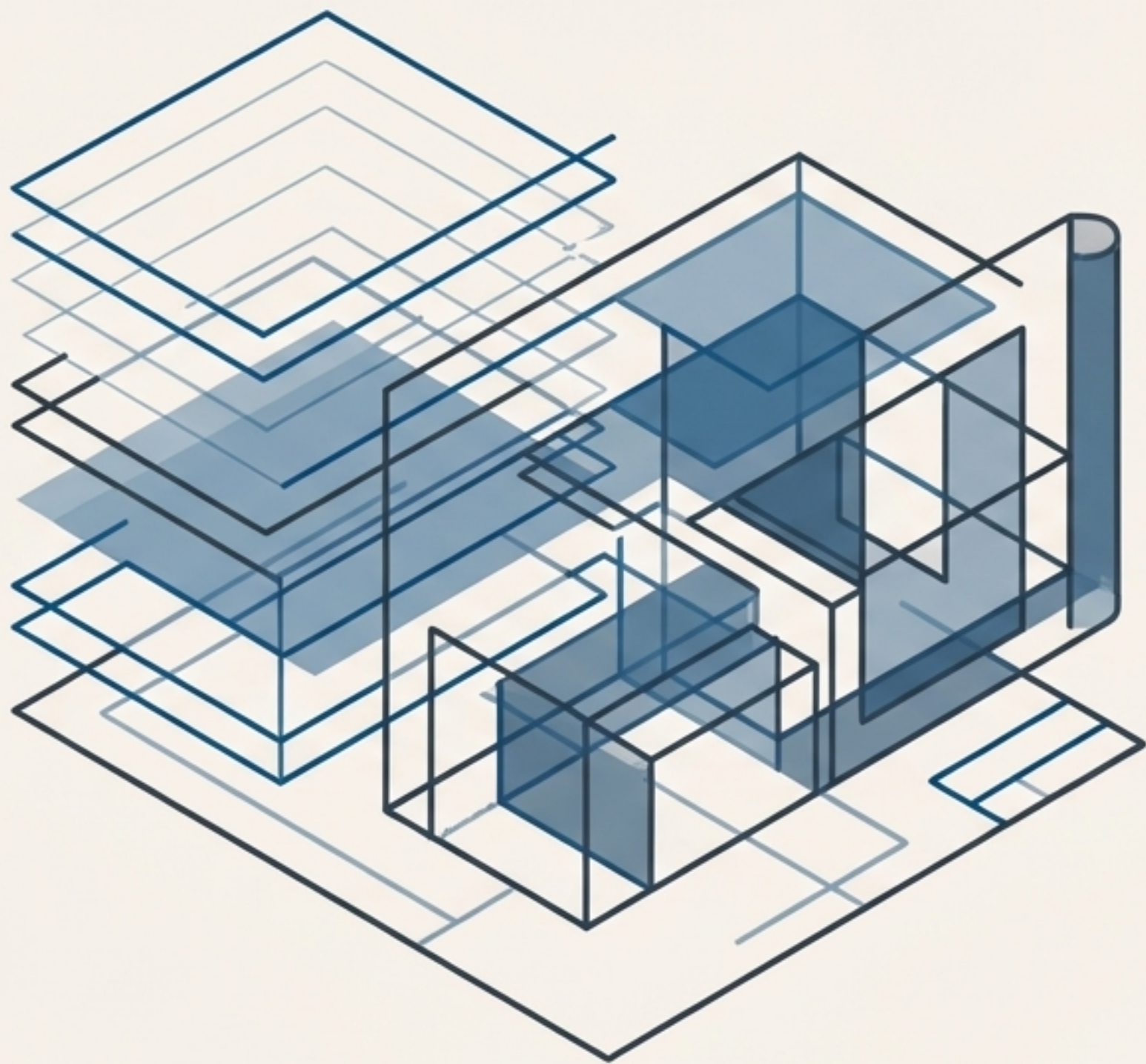
従来の資質・能力に加え、技術が発展した現代社会に対応するため、新たな能力の向上が不可欠です。

基盤となる人間力・専門性

- 使命感、教育的愛情
- 教科に関する専門的知識
- 実践的指導力

新たに重要となる能力

- **情報活用能力・データリテラシー**：AI、ビッグデータ等の技術発展に対応。
- **多様な人材との連携・協働力**：外部の専門家等と連携し、組織の教育力を高める。



ビジョンから実践へ：求められる専門性をいかに育成するか

「令和の日本型学校教育」のビジョンを実現するためには、それを現場で担う教員の資質向上が鍵となります。

特に、小中学校間の断絶を乗り越え、円滑な接続を実現するには、専門的知識と技能を持つ人材が不可欠です。

その課題解決に向けた、具体的な一歩が始まっています。

戦略的解決策：小中連携教育コーディネータの養成

- 小中学校間の円滑な接続を実現し、「中1ギャップ」を解消するための核となる人材として、「小中連携教育コーディネータ」の育成が急務です。
- このコーディネータは、両校種の教育課程を深く理解し、教員間の連携を促進し、9年間の学びを一体的にデザインする専門家です。
- その育成を目指し、本学では新たに「小中連携教育コーディネータ養成カリキュラム」を開発しました。



根拠に基づくカリキュラム開発のプロセス

本カリキュラムは、国の教育方針と法制度に基づき、求められる資質・能力を明確化した上で開発されました。

国家ビジョン：「令和の日本型学校教育」答申



法的根拠：教育公務員特例法等の改正



教員育成指標：キャリアステージ【中学校・資質向上期】の指標



資質・能力の明確化：コーディネータに求められる専門性の定義



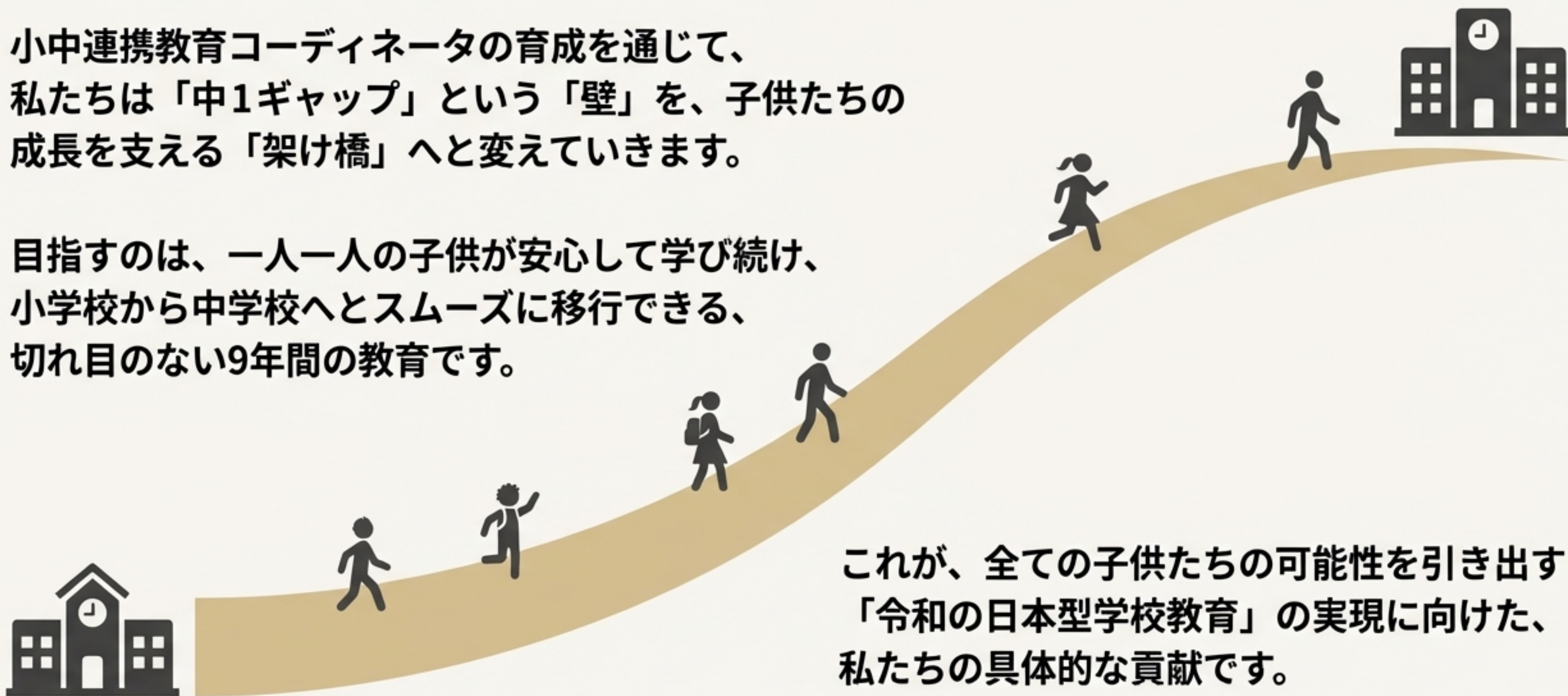
カリキュラム開発：「小中連携教育コーディネータ養成カリキュラム」

目指す姿：分断から、連続性のある9年間の学びへ

小中連携教育コーディネータの育成を通じて、
私たちは「中1ギャップ」という「壁」を、子供たちの
成長を支える「架け橋」へと変えていきます。

目指すのは、一人一人の子供が安心して学び続け、
小学校から中学校へとスムーズに移行できる、
切れ目のない9年間の教育です。

これが、全ての子供たちの可能性を引き出す
「令和の日本型学校教育」の実現に向けた、
私たちの具体的な貢献です。



本講の学習目標と考察課題

このテーマについて理解を深めるため、以下の点について考察してください。

学習到達目標

1. 小中連携教育に関する社会的な課題について説明できる。
2. 小学校教員に求められる専門性について具体例を示して説明できる。
3. 小学校と中学校の円滑な接続の在り方について説明できる。

課題

1. 教員の資質向上についてその方策について説明しなさい。
2. 小中連携教育に求められる専門性について、具体例を挙げて説明しなさい。
3. それぞれ地域の教員のキャリアステージにおける資質の向上に関する指標を説明しなさい。